

# 地域課題を資源とした産業創出による 地域活性化の可能性

|           |       |
|-----------|-------|
| 地域創生グループ  | 笹木 和美 |
| 移住・交流推進課  | 平野 玲妃 |
| 地域リーダー養成課 | 阿部 理沙 |

# 目次

## 1. はじめに

- (1) 調査目的.....2
- (2) 調査団体の選定理由.....2

## 2. 事例調査

- (1) 愛媛県今治市「しまなみイノシシ活用隊」
  - ①実施までの経緯..... 3
  - ②活動内容..... 4
  - ③地域にもたらした影響..... 5
  - ④今後の展望、課題..... 5
  - ⑤地域課題の資源化にむけて..... 6
- (2) 広島県呉市「合同会社よーそろ」
  - ①実施までの経緯..... 6
  - ②活動内容..... 7
  - ③地域にもたらした影響..... 9
  - ④今後の展望、課題.....10
  - ⑤地域課題の資源化にむけて.....10

## 3. おわりに.....11

## 1. はじめに

### (1) 調査目的

平成27年9月の国連サミットで持続可能な開発目標<sup>1</sup>（以下「SDGs」という。）が採択されてから、多くの企業が環境問題や人権などに配慮した事業に取り組んでいる。国や自治体が主催するSDGsをテーマに据えたイベントやセミナーも増加し、SDGsの機運が高まるなか、持続可能な地域経済・地域社会を実現するためビジネスの手法を用いて課題を解決する地域課題解決型ビジネスが広がりを見せている。

地域にとっての課題が存在する分野を対象とするこのビジネスは、子育て支援から介護支援、人材育成、エネルギー開発、農業振興、地域産業の創出など多岐にわたる。また、これらの取組は地域活性化の一翼を担うものとしても注目されており、各都道府県が補助金制度を設けて、その事業を支援している。

本調査では、地域課題を資源化した産業の創出に注目し、今まで課題としてマイナスに受け止められてきたモノやコトを価値に変え、それらを資源として地域に新しい産業を生み出すことによって地域経済に貢献している事例を調査する。この調査を通じ、地域の課題を資源として捉える視点を学び、地域課題を資源とした地域活性化の可能性を探りたい。

### (2) 調査団体の選定理由

地域課題を資源とした新たな産業づくりや地域活性化を進める事例として、地域課題をプラスに捉え事業を展開している下記の2団体を調査対象に選定した。

#### ①愛媛県今治市「しまなみイノシシ活用隊」

今治市の島しょ部で栽培される柑橘類に多大な被害を及ぼしているイノシシ被害を解決するため地域の有志が設立したこの団体は、イノシシを害獣ではなく資源と捉え、食肉として加工・販売している。その他、革の販売、骨を活用した食品開発等を実施している。

#### ②広島県呉市「合同会社よーそろ」

これは、江戸時代に北前船の寄港地として栄えた御手洗地区で、空き家となっている古民家を活用したカフェやゲストハウスを運営する団体である。観光客が立ち寄れ

---

<sup>1</sup>誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、令和12年を年限とする17の国際目標。169のターゲット、232の指標が決められている。

るカフェや商店、宿泊施設を整備することによって、地域の課題となっていた観光客の滞在時間の延長を実現している。その他、サイクリストが食事をする場所が欲しいといった観光客のニーズにあわせ飲食店等を展開するほか、特産品であるレモンなどの柑橘類を使用した商品開発を実施している。

## 2. 事例調査

### (1) 愛媛県今治市「しまなみイノシシ活用隊」

#### ① 実施までの経緯

「しまなみイノシシ活用隊（以下「シシ活隊」という。）」は愛媛県今治市の大三島に事務所を置き、イノシシの狩猟や食肉加工・販売等を行っている。全国的に珍しい民間主導の団体として、設備更新に係る費用などは市や県の補助を受けているが、団体運営に対する補助は受けていない。瀬戸内海西部の芸予諸島のほぼ中央に位置し、広島県尾道市と今治市を結ぶ西瀬戸自動車道（愛称：しまなみ海道）の中継点である大三島と伯方島を活動範囲としているが、これは野生動物の食肉加工を行う場合、捕獲から冷蔵までを1～2時間で行うことが推奨されていることによる。平成22年6月に渡邊秀典氏を代表として発足し、現在は大三島で年間800頭ほど捕獲されるイノシシの内、約200頭を食肉として加工している。

今では多数のイノシシが狩猟される大三島だが、かつて島内にイノシシは生息していなかった。しかし、西瀬戸自動車道が完成した平成11年ごろから島内でイノシシが目撃されはじめ、農産物の食害など様々な獣害が発生するようになった。特に島の主要農産物であるみかんの食害が顕著で、生産者の中には年収が2～3割減少した者もある。イノシシに対する防衛策として農地を柵で囲っているものの、毎年数回破られており、対策としては不十分だった。並行して罠による駆除も行っているが、罠の設置やイノシシの止め刺しなどは、いずれも時間がかかる重労働である。また、命を育む立場にある農家にとって止め刺しによる精神的な負担も大きく、他にかかってほしいと考えながら罠を設置する者もいたという。イノシシの被害を軽減するためにも継続した駆除が必要であるが、農家が本業の傍らで行うのは困難であった。

渡邊氏も地元みかん農家の生まれで、自身の畑のみかんを守るためイノシシ対策を講じていた。しかし、農作業の中で継続してイノシシ対策を行うことに限界を感じ、駆除に専念する者が必要だと考えるようになった。そのためには駆除作業の収益化が必要であり、イノシシから利益を得る仕組みを組み込んだ企画を、農家や猟師の集会で提案した。同時に、今治市やJAにも掛け合ってはみたものの、色よい返事をもらうことはできず、これは自分たちが取り組むしかないという覚悟を決め、シシ活隊を結成するに至った。

## ②活動内容

### (1)イノシシ肉の解体・加工

シシ活隊は大三島と伯方島で罠の設置・見回りをしている。

イノシシが罠にかかった際は現地で止め刺しを行った後、食肉加工場（旧大三島町学校給食センター）へ運搬したうえで解体・食用加工し、獲れた季節や肉質状況に応じて出荷している。現在、最も注文が多いのは背骨を除いた半頭単位の冷蔵納品で、半身での出荷が難しい個体は部位ごとに冷凍で出荷している。この他、スライス肉やミンチ肉などの一次加工品、ソーセージやフランクフルトなどの二次加工品も製造・販売している。

シシ活隊が結成されたころは、イノシシ肉など野生動物の肉は消費量が少なく、なじみがうすいものであった。野生動物の肉に対して“かたい”“くさい”といったマイナスのイメージが先行していたこともあり、売上は伸び悩んでいた。そこで、イノシシ肉の美味しさを理解しているレストランのシェフなどへ売り込みを図り、彼らの要望に応じていくことで徐々にリピーターを獲得して、売上を確保してきた。平成26年に厚生労働省が野生鳥獣肉の衛生管理に関する指針を出したが、これに前後してジビエという言葉の認知度が上昇し、併せてシシ活隊のイノシシ肉の認知度も向上していった。今では愛媛県の特産品の一つとなっている。

### (2)皮革製品

シシ活隊では肉だけでなく、皮や骨も有効活用している。

Jishac というブランドでレザー製品を手掛ける重信幹広氏は、地域おこし協力隊を経て東京から大三島へ移住し、シシ活隊の隊員としても活躍している。当初、シシ活隊が利活用していたのはイノシシ肉のみで、皮は廃棄していた。シシ活隊の取組と共にこのことを



Jishac の商品

知った幹広氏は、妻の瑠依氏がレザークラフトを学んでいたこともあり、その皮を利用することを思いついた。現在、幹広氏はシシ活隊から皮を購入し、品質を高めるため皮に付着した筋・脂肪の除去や縁取りなどの下処理を行っている。なめし加工は東京の業者に依頼しているものの、完成した革は「島シシレザー」の名で日本各地のアーティストへ販売している。Jishac ブランドで販売する製品も島シシレザーから作られており、バックや財布、ヘアゴムなど多様なラインナップが揃っている。

### (3) 猪骨ラーメン

大三島唯一のラーメン店「猪骨ラーメン」は、名前のとおりイノシシの骨を使ったラーメンを提供している。店主の吉井涼氏は埼玉県からの移住者で、移住先を検討する中でシシ活隊の取組と廃棄処分されているイノシシの骨のことを知った。島内にはラーメン店がなく、吉井氏がもともと料理を得意としていたこともあり、イノシシの骨を利用したラーメン作りを思い付き、地域おこし協力隊として大三島に移住した。隊員として活動을続けながらラーメンづくりを学び、平成30年4月に現在の店舗をオープンした。イノシシの骨を使ったラーメンは全国的にも珍しく、今ではしまなみ海道の観光客が立ち寄る人気店となっている。



猪骨ラーメン

### ③地域にもたらした影響

このように、現在大三島ではシシ活隊の取組によって、イノシシを活用した新たな産業が生まれている。平成28年には、大三島におけるイノシシによる農業被害額を、シシ活隊の売上高が上回った。

経済効果だけではなく移住にも効果が出ており、シシ活隊がイノシシの駆除・解体を通じて、皮や骨を“生産”していたことが、重信氏や吉井2氏の移住につながった。両氏がイノシシを活用した新たな産業で生活を営む姿が、新たな取組を模索する若い世代が移住やUターンを考えるきっかけとなり、同時に地域住民が移住者に対して理解を深める一因ともなっている。



### ④今後の展望、課題

イノシシはその生息域が拡大し、今日では青森県でも目撃されるようになった。各地が獣害対策に取り組む中で、捕獲・駆除した個体の有効活用に向けた加工場の設置件数が増えているが、多くは行政主導で進められており、運営費の一部を補助金等で負担する事例も散見される。これらの施設は採算性が悪くとも成立するため、イノシシの加工肉を比較的安価



イノシシの分布状況

(環境省資料「イノシシの近年の動向」より)

に市場へ提供できる。イノシシの食肉加工場の増加と安価なイノシシ肉の流入が見込まれる中、シシ活隊の売上をいかに確保していくかが今後の課題である。

一方で、渡邊氏はシシ活隊と同様の取組を全国へ広げていきたいと考え、加工場の設置を検討する地域に対してサポートを行っている。シシ活隊には多くの視察者が訪れるとともに、組織や加工場の設置に協力を求める声が数多く寄せられているが、このことについて渡邊氏は次のように語る。

「シシ活隊のような仕組みを作り、運営を継続するためには、場所、人、人間関係の3要素が必要となるが、これを揃えることができる地域はほとんどなく、組織の立ち上げになかなか結び付いていかない。具体的には、保健所の許可や資金調達に問題が生じて施設の準備ができない、施設の管理・運営を行う能力を持った人を確保できない、自治体の担当者あるいは地域の猟師の理解・協力が得られないなどの理由から、組織の立ち上げを断念せざるを得ない地域が多い」

このように組織や加工場の設置には高いハードルがあるが、渡邊氏の協力により平成29年に松山市が組織を立ち上げている。また、令和元年には、西予市の既存組織の立て直しに取り組むなど、シシ活隊の活動で得られた知見をより多くの地域に広げるべく、渡邊氏は今後もサポートを継続する考えだ。現在は、シシ活隊の取組を導入しやすいよう、仕組みを汎用化することを検討している。

## ⑤地域課題の資源化にむけて

地域課題を資源と捉えるためには、既存の価値観からの脱却が必要となる。その際、地域住民だけで検討しても同じ側面ばかりに捕われがちで、新たな側面を見出すことは難しい。育った環境や考え方、職業や経験などが違う人が集まることで新たな側面が見えてくることもある。シシ活隊の活動では当初はゴミに過ぎなかった皮や骨も、島外からの移住者が価値を見出し、産業へとつなぐことができた。異なる価値観や意見に触れた時、否定する方向に走ってしまう人は少なくない。多様な意見を受け入れる土壌を地域にいかに形成するかが重要となる。

## (2) 広島県呉市「合同会社よーそろ」

### ①実施までの経緯

合同会社よーそろは、地域の魅力を最大限引き出しデザインすると同時に、様々な問題に取り組み解決することを目的として平成26年3月に設立され、広島県呉市豊町御手洗で、空き家を改修し、カフェやギャラリー、ゲストハウスなどの事業を展開している。

江戸時代から昭和初期に至るまで、瀬戸内海交通の中継港として風待ちや潮待ちの船で賑っていた御手洗には、それぞれの時代に建てられた貴重な建物が混在している。

平成3年に海岸沿いの家屋等が台風19号の被害を受けたことから、重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」という。）の選定への動きが加速し、平成6年に重伝建地区に選定された。選定後、町並み保存による地域おこし活動を行うため、地域住民の有志が「重伝建を考える会」を立ち上げた。この会は、歴史勉強会を開く一方で、観光ボランティアガイド、町内美化運動、一輪挿し運動（種から育てた花を町家の壁に飾り、花の様子を見回る）など様々な活動を行ってきた。しかし、人口減少により空き家が目立つようになり、また高齢化が進み地域おこし活動を担う人材が徐々に不足し始めていた。そうした問題を抱える御手洗で、古民家カフェを開業したのが、合同会社よーそろの代表を務める井上明氏である。広島市出身の井上氏は、勤めていた会社を辞め、妻の実家がある呉市に家族で移住した。呉市のことをよく知るため、呉市が主催する観光ボランティアガイド養成講座を受講し、御手洗のことを知った。美しい島と海の風景や伝統的な建物が残る街並みに魅了された井上氏は、半年間ほど御手洗でボランティアガイドを行い、そこで感じた課題やニーズを踏まえて開業したのが「船宿カフェ若長」である。

## ②活動内容

### (1) 観光資源の発掘

井上氏はボランティアガイドを務める中で、ゆっくり休憩できる場所がないという観光客の不満の声を聞いていた。また、豊町は広島の特産品である大長みかんや大長レモンの発祥の地であるが、それらを提供する場所がないことも気にかかっていた。その折に、ボランティアガイドの会長から「御手洗で何かすればいいのに」と船宿を紹介された。それは、元は大洲藩・宇和島藩指定の船宿であり、呉市が管理、重伝建を考える会が借り上げていた。平成16年に重伝建を考える会の創立10周年の記念イベントで展示場として利用された後は、手付かずの状態であった。雨戸が締め切られた2階は立ち入り禁止となっていたが、雨戸を開けたときに広がる真っ青な海と島々の素晴らしい風景に感動し、皆にも見てもらいたいと考えた井上氏が、重伝建を考える会や呉市と交渉し、船宿の利用許可を得て、平成23年にカフェの開業にこぎつけた。開業に際して、地域の人々が展示品として使用されていた船箆箆や冷蔵庫



船宿カフェ若長



カフェの窓から見た風景

を譲ってくれ、内装もあまり手をかけずに始めることができた。その後試行錯誤を重ね、今では御手洗の美しい風景を眺めながら、特産品を使ったメニューが味わえるカフェとして、多くの観光客が訪れている。また、これまでその船宿の管理のため船大工に委託管理料を支払っていた呉市は、井上氏から施設利用料を得るようになった。

その後、平成24年に井上氏は2つ目の空き家を改修し、「薩摩藩船宿跡脇屋」というギャラリーを開業した。当時、土産物がマーマレードと海産物しかなかったため、観光客に買ってもらえるような土産物を作りたいと考え、作家に声をかけて、置物やショルダーバックなど御手洗オリジナルの作品を展示販売している。船宿カフェ若長、薩摩藩船宿跡脇屋と事業を展開していくうちに、徐々に観光客が増えてきたが、御手洗を訪れた観光客をまち全体で受け入れるにあたり、商品や食の選択肢を充実させること、改装した空き家で商いができる人材を育てることなど多くの課題が出てきた。観光業としてサービスの選択肢を広げつつ、ビジネスの拡大を図るためには、御手洗の魅力を伝えるデザインと人材が必要と考えた井上氏は、妻と合同会社よーそろを設立し、知り合いのデザイナー小林隆暁氏を引き入れた。小林氏は、各店舗の暖簾やショップカードなどのデザインを担当している。その後、井上氏の娘が通う保育園で保育士をしていた矢野智之氏も加わり、さらに事業を拡げていった。御手洗を訪れるサイクリストが増加するなか、気軽に昼食をとれる場所が不足していたため、平成26年には「鍋焼きうどん尾収屋」を開業した。初代店主を矢野氏が務め、かつて行商船で売られていた鍋焼きうどんが御手洗で人気であったという来歴を大切にし、うどんは当時と同じくアルミ鍋で提供している。現在は店主が変わり、オリジナルメニューもできてリピーターも増え、御手洗のソウルフードとなりつつある。

## (2) 移住の促進

合同会社よーそろ設立後、様々な事業を展開していくうえで、御手洗の魅力を独自の表現で伝えるプレーヤーを必要としていたことや、広島県が新しく移住促進の部署を立ち上げたことを受け、井上氏は「商い」をテーマとして移住促進に取り組むことになった。その際、御手洗のメインストリート常盤町通りに建つ旧観光協会の建物を、物産館兼チャレンジ商いができる場所として整備したのが「潮待ち館」だ。また、移住してきた夫婦の生業を作る場所を確保するため、井上氏が所有者と交渉して空き家を低家賃で借り受け、写真館を整備するなど移住者のサポートも行っている。これらの取組により、御手洗に移住し、起業したいという人が増えてきている。現在潮待ち館には、コーヒー、お菓子で起業したいというそれぞれの移住者が入り、鍋焼きうどん尾収屋が以前の場所から移転してきている。建物の改修や事業を行うために必要な地域内の調整は井上氏が担い、潮待ち館で事業を行う彼らには、観光客に喜んでもらえるような価値創造と自身の表現のブラッシュアップに専念してもらっている。

### (3)滞在時間の延長

井上氏は重伝建を考える会の事務局長も兼務しており、平成27年には、空き家の現状を把握し利活用するための空き家データベースを整備する一方で、これからのまちのあり方を考える「御手洗みらい計画」を作成した。その中で、御手洗の街並み全体を博物館に見立て、美しい景観や島独自の文化、住民同士の温かい関わり合いなどを保ちつつ発展させることを目指した「御手洗ミュージアム構想」を立案し、その実行委員会を立ち上げた。呉市商工会を中心に外国人ライターや建築家など様々な専門家を集めて委員会を組成し、外部の視点を取り入れながら、御手洗みらい計画のブラッシュアップを図ることとなり、その過程で、御手洗の魅力をより深く味わってもらうための宿泊事業の必要性を再認識したという。そこから、データベース化された空き家を活用して、価格帯の異なる3つの宿を約1年半で整備した。

最初に、大正時代に建造された洋館を改装して、低価格の宿「GUESTHOUSE 醫<sup>くすし</sup>」を平成29年に開業した。2つ目は、「閑月庵新豊<sup>かんげつあんしんとよ</sup>」である。昭和初期まで旅館を営んでいた新豊から建物を引き継ぎ、一日一組限定の宿兼レストランとして平成30年にリニューアルオープンした。周辺にはないような高価格帯の宿で、窓の外に広がる海や島々の風景と江戸時代末期に建てられた建物をじっくりと味わえるしつらえが自慢である。1階の和食レストラン SEAFRONT DINING 新豊の経営は料理人篠崎氏が担い、宿泊予約が入っているときは1組の宿泊客のためだけに、とびしま海道で獲れる新鮮な魚介類を使って、腕を振るう。開業当初、地域の人々は誰が泊まるのかと心配していたが、実際に宿泊客が増えてきて、連日新豊に電気が灯る姿を目にすると、御手洗の格が上がったようだと話していたという。3つ目は、大正時代に建築された元染物屋をリノベーションし、平成30年に開業したシェアハウス「港町長屋染初<sup>みなとまちながやそめはつ</sup>」である。この建物は300㎡とかなりの広さだったので、その一角に食品加工場も整備し、Uターンしたパティシエ山本氏と共に特産品の柑橘を使った新たな商品づくりを行っている。

### ③地域にもたらした影響

合同会社よーそろの取組により、まちの若い世代が主体的にまちづくりに関わるようになってきた。補助金に頼らず自分達で御手洗を何とかしようと、持続可能なまちづくりを実践するため、井上氏を含めた30～40代の9名が、一般社団法人御手洗デザイン工房を立ち上げ、重伝建を考える会の実行部隊として観光振興を通じたまちづくりに取り組んでいる。御手洗にある3つの神社それぞれのオリジナル絵馬を製作し、観光客が絵馬を購入・奉納しながら三社を巡る絵馬プロジェクトを企画したほか、御手洗の文化継承を担うガイドの減少を補うため音声ガイドを作成し、観光客に貸し出すなど、ボランティアではなく稼げる仕組みを一つずつ作り上げ、サービスをアップ

デートしながら地域経営が成立するサイクルを作り出そうとしている。

#### ④今後の展望、課題

井上氏は、この1、2年は、新しい事業に着手するよりも現在の事業のブラッシュアップに注力し、これからの社会や顧客のニーズの変化に柔軟に対応できる体制を整えていく考えである。その中でもレジのセルフ化や無人店舗化に挑戦することで御手洗への移住者や起業者が自分の表現に専念できる体制を整えたいと考えている。また、現在6物件の空き家相談を受けており、お試し暮らしができる住宅兼食品加工場など複数の機能を持つようなリノベーションを検討している。例えば、レストランで提供する魚料理は、客足の多寡によって仕入れにロスが生じるため、干物工場を作ることでもリスクを少なくできる。複数の食品を扱う営業許可が取れる施設を作ること、生じていたロスを色々な商品に変えることができる。そして、そこに住みながら加工場で働く、または自分の持つ仕事を行うなど様々な選択肢を提示できるようなリノベーションを進める考えだ。

今後課題としては、事業展開を担う人材が不足していることがあげられた。

#### ⑤地域課題の資源化にむけて

増加していた空き家を利活用し、観光資源を創出し、観光客の滞在時間の延長につなげた井上氏は、地域課題を資源化するうえで大切な視点を3つあげた。1つ目は好奇心である。地域にとってプラスのモノもマイナスのモノもどちらも資源と捉え、楽しんでそれを発掘する好奇心を持つことが新たな発見につながっていく。2つ目は多角的視点である。井上氏はどうやったら顧客が喜ぶか、大事な人をこの場所に連れてきてくれるかを意識して、常に面白いものがないかアンテナを張っている。話題の場所やお店に実際に足を運び、そこで出会ったものと今ある資源を組み合わせたらどうなるかを考えることが新たな事業を生み出していく。3つ目は、変化するニーズを汲み取り、それに柔軟に対応しようとする行動力である。失敗するのは当たり前、100回失敗しても1回成功すればいいという気持ちで地域にあるものを使い、成功しなくてもマイナスにはならないようなやり方で、トライアンドエラーを続けながらやりきる姿勢こそが新たなチャレンジの原動力となる。

合同会社よーそろは、単にたくさんの観光客が御手洗を訪れることを求めているのではない。観光客が御手洗の風景や、建物、文化など“続いているもの”を尊重してくれたり、地域の価値を丁寧に受け取る人が増えたりすることを望んでいる。そうした観光客を大切に迎え、滞在しないとわからない御手洗の魅力を感じてもらえるよう、サービスをアップデートし続ける。そうするうえで地域に合わせることも大切であるが、地域住民の考えだけでは新しいものが生まれにくい。地域住民の意見を否定せず、バランスを取りながら、そっと新しいものを提示していくことを井上氏は大切にしている。

いる。こうした井上氏の行動が住民に刺激を与え、まちの各所で新たな動きが出るなど、好循環を生んでいる。

### 3. おわりに

今回調査した2団体は、地域課題を資源として活用することで新たな産業を創出しただけでなく、地域にとって多くの良い影響ももたらしめている。例えばシシ活隊では地域農業に大きな被害を出すイノシシを駆除することで被害の軽減を図るとともに、未利用資源であったイノシシを活用して得た利益の地域への還元も進めている。一方、合同会社よーそろでは、古民家を活用することで景観を保全しつつ、宿泊施設や食事処の開設による観光客の誘客や滞在時間の延長を実現している。また、まちの賑わい創出や、地域で新しいことを始めたいと考える人材の移住・Uターン促進にもつながっている。

調査事例から地域課題を資源として新たな産業を創出し、地域活性化につなげるためには多様な人材が関わるのが重要だとわかった。地域でマイナスだと捉えられてきたモノやコトが、他の地域から見ると価値を持つものであることがある。そのことに気づきやすいのは移住者やUターン、関係人口など既存の価値観にとらわれず地域を外側から見る視点を持つ外部の人材だ。

シシ活隊では、団体の活動内容に興味を持った外部人材が地域おこし協力隊として大三島に移住し、それまで廃棄されていた皮や骨を活用した新規事業を立ち上げ、まちの賑わい創出や観光客誘致等につなげている。

合同会社よーそろでは、移住者である井上氏が活用されていなかった空き家に価値を見出し、カフェを開業することで地域課題である観光客の滞在時間延長を実現した。また、かつて海運が盛んだったころに行商船が提供していた鍋焼きうどんに着目して食事処を開業し、当時問題となっていたサイクリストの食事場所を確保するとともに、観光客の誘致につなげている。

これらの事例のように外部人材が活躍するためには、異なる価値観を理解し、地域が変化していくことを受け入れられる土壌づくりや、地域住民と外部人材の双方に歩み寄ろうとする姿勢が必要となる。シシ活隊や合同会社よーそろの取組は、地域の人々の理解があったからこそ事業として継続できるものとなったといえる。

素晴らしいアイデアや能力を持った人材が来たとしても、地域に彼らを理解し、応援していこうという気持ちがないと彼らが本来の力を発揮することはできない。地域には変化を嫌って新しいことを否定する人もいる。現状を維持することも大切だが、それに固執すると新しいことに挑戦する機会がなくなり、地域にとってプラスとなるものも生まれなくなる。渡邊氏のように地域課題を解決するために自ら新しいことに

チャレンジし、積極的に外部の人材を受け入れ、地域住民とつなぐハブとなる地域の人材がいることにより地域に新たな流れが生まれる。そして、井上氏のように地域住民とともに活動し、彼らの考えよく理解し、気持ちを共有したうえで、今まで地域にあったが見過ごされてきたモノやコトを資源とし、あらたな産業を作り上げる外部人材がいることで地域に元気が生まれる。

この調査を通じて、地域課題に価値を見出し、それを資源として新たな産業を作り上げ、地域活性化につなげるためには異なる視点を持つ人材が共に課題について考え、意見を交わせる地域であることが必要であり、自分とは異なる意見や価値観を持つ人を否定せず、変化を楽しめる土壌が整っていることが重要であることを改めて認識することができた。